

2023年度

愛知の自治的諸活動と生活指導

(第59集)

も く じ

I はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

II 本年度の研究活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

III 研究の内容（実践研究事例）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
 小学校5年生 自分に自信をもち、新しいことに挑戦することができる子どもの育成
 中学校1年生 前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成

IV おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
 1 明らかになったこと
 2 来年度への課題

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会 自治的諸活動と生活指導部会

2023年度 教育課程研究委員

ブロック推薦

◎部長 ○副部長

名古屋			尾張			三河		
氏名	単組	分会名	氏名	単組	分会名	氏名	単組	分会名
○大橋 史人	名古屋	明治小	◎小檜山 亮	海部	甚目寺南中	○神谷 淳一	碧海	高浜中
小島 健司	名古屋	赤星小	岡戸 信輔	知教連	加木屋南小	小野 覚	豊田	童子山小

第69～72次教育研究全国集会レポート提出者

第69次			第71次			第72次		
氏名	単組	分会名	氏名	単組	分会名	氏名	単組	分会名
羽根田 知樹	名古屋	平針南小	松下 裕哉	名古屋	千鳥小	竹田 裕亮	海部	立田南部小
浅野 和也	西春	清洲中	蟹江 陽平	岡崎	男川小	皆川 博之	名古屋	名塚中

第73次教育研究全国集会レポート提出者 日比野佑哉（名古屋・岩塚小）
 足立昌洋（安城・東山中）

I はじめに

本部会では、子どもたちが周りの仲間との間に良好な人間関係を築き、互いに意見を出し合ったり、教え合ったりする中で、どんなことにも意欲的にとりくむことができる力を身に付けることをめざして実践にとりくんできた。こうした実践は、子どもたちが学力的な「基礎・基本」を身に付けるための土台になっているのではないかと考える。また、本部会では、これまでに「複雑・多様化している現代社会の中で、たくましく生きていく力を育てる」という生活指導の方向性を確立してきた。そして、次のような目標を掲げ、教育研究活動にとりくんできた。

- 複雑・多様化している現代社会の中で、主体的に生きていく力を育てること。
- 集団の中で、民主的行動力を養い、社会性を育て、自治能力を育てること。
- 協働する力を深めながら、一人ひとりの人間としての尊厳を学びとらせること。

しかし、子どもたちを取り巻く状況は、複雑・多様化し、厳しさを増している。その中で、子どもたちの心は大きく揺れ動いている。積極的に周りの子とかかわることができない子、友だちへの気遣いや優しさをうまく表現できない子、素直に人の話が聞けない子のように、よりよい人間関係づくりを苦手にしていく子どもが増えているように感じる。それに加えて、暴力的手法で相手を傷つけたり、スマートフォンやSNSの普及により匿名で他人を誹謗中傷したりするなどのいじめや、長期欠席についても、昨今大きな課題として残されている。

わたしたち教員は、学校集団生活での不適応に起因するさまざまな諸問題について、全力で解決していかなくてはならない。そのためには、優しい心、認め合う心、感動する心を子どもたちにもたせ、たくましく生きていく力を身に付けさせることが大切である。そして、悩み苦しんでいる子どもたちの気持ちを真剣に受け止め、子どもたちが抱えている問題やその背景にあるものを正しく理解し、支援していかなければならない。

具体的には、わたしたち教員は、まず、子どもたちと確かな信頼関係を築かなければならない。その上で、子どもたち一人ひとりのよさを認め、子どもたちが集団の中で「自分は役に立っている」「必要とされている」という気持ちを味わうことができるようにすること、家庭や地域との連携を深めること、子どもたちの心に、周りの人に対する優しさや、思いやりの気持ちを育むことなどが大切であると考えます。

本年度は、着実な実践の積み重ねから生まれた成果とこれからの課題を話し合い、「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに実践にとりくんだ。

II 本年度の研究活動

- 2023. 5. 2 教育課程研究委員全体会〈名古屋市公会堂〉
本年度の研究主題「たくましく生きる子どもを育てよう」の決定
- 2023. 8. 8 第1回部会〈県教育会館〉
研究主題に沿って、小中学校それぞれの研究の3つの柱の確認
- 2023. 9. 19 第2回部会〈県教育会館〉
研究の3つの柱の確認と県教研分科会のすすめ方を検討
- 2023. 10. 10 第3回部会〈県教育会館〉
県教研分科会の具体的なすすめ方や当日の発表・討論のあり方を検討
- 2023. 10. 21 第73次教育研究愛知県集会〈愛知県産業労働センター〉
- 2024. 2. 21 第4回部会〈県教育会館〉
本年度の研究のまとめ

Ⅲ 研究の内容

第 73 次教育研究愛知県集會にむけて

「たくましく生きる子どもを育てよう」の統一テーマをもとに、多数のレポートが提出された。

【小学校部会】レポート数 17 本

課題

- (1) 子どもの気持ちを大切にし、実態を把握したうえで、よりよい人間関係を築くためにどのような活動を展開していくのか。
- (2) 心理的な背景や発達段階をふまえ、子どもたち一人ひとりをどのように理解し、支援していくのか。
- (3) どのようにして、集団の質を高めていくのか。

課題(1)にかかわるものとして、友だちのよいところを見つけ合う温かみのある学級づくりや話し合い活動の工夫によって、よりよい人間関係を構築し、お互いを認め合ったり、自己肯定感を高めたりするレポートが報告された。

課題(2)にかかわるものとして、認め合い活動や異学年交流活動などを通して、温かい人間関係をつくり上げていった実践が報告された。また、問題を抱える子どもたちに対し、個々に応じて適切に支援し、自己有用感を高めることをめざしていくレポートも報告された。

課題(3)にかかわるものとしては、子どもたちが中心となって話し合い、活動の立案・実行までをしっかりと行うことができるよう、教員による支援をどのようにしていくのかを明確にしたレポートも報告された。

提出されたレポートから、以下のことについての必要性が確認された。

- (1) 望ましい集団をつくるために、どのような活動を展開していくのか。
- (2) 活発な話し合いのための支援をどのようにしていくのか。
- (3) どのような目標設定のあり方がよいのか。また、活動の振り返りをどのように生活にいかしていくのか。

【中学校部会】レポート数 9 本

課題

- (1) 子どもの気持ちを大切にし、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方。
- (2) リーダーの育成や集団の質を高めるための支援のあり方。
- (3) 問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方。

子どもたちの自己存在感を味わわせるための支援のあり方では、協力的・参加的・体験的な活動を学校生活の中にとりくみ、その中で個や集団の課題を認識し、解決していこうとする集団づくりが大切であるという意見が出された。また、子ども主体で学校行事を実施することは、成功が担保されているわけではないため、失敗をする可能性もあるが、子どもに成功体験を味わわせたいがために教員が指示しすぎる可能性もあるので、教員側がどこまで関与するかの判断が非常に難しいという意見もあり、有意義な討論がなされた。

集団の質を高める支援のあり方では、子どもたちどうしが問題を共有した上で、その解決にむけて話し合い、実践するとりくみを続けていくことにより、力を合わせて解決しようとする子どもの育成について話し合われた。また、学級力アンケートによって学級の実態を把

握し、P D C A サイクルを学級活動に組み込み、次のステップに自分の意見が反映される経験を積む中で、子どもたちに自己存在感を味わわせることの大切さなどが話し合われた。

問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方では、安心して安全な風土、コミュニケーションスキル、ソーシャルスキルなどの言葉が多く出された。自他を大切にすることの重要性が話し合われた。また、長期欠席の子ども自立をめざした支援の実践が報告された。

提出されたリポートから、以下のことについて確認された。

- (1) 自他のよさに気づき、そのよさをいかして活動できる場や時間を確保して、子どもたちの自己存在感や自己有用感を育むための支援のあり方。
- (2) リーダーの育成や集団づくりの中で子どもたちの主体性を育てたり、縦割り活動をいかしながら集団の質を高めたりする支援のあり方。
- (3) 問題行動の解決や予防のために、学校・家庭・地域のつながりを深める支援のあり方や、関係諸機関と連携して、子どもたち一人ひとりに対する支援のあり方。

小学校5年生 実践研究事例

自分に自信をもち、新しいことに挑戦することができる子どもの育成

1 実践のねらい

本学級の子どもたちは、小規模校であるがゆえに、1年生から5年生まで同じ学級で過ごしてきた。そのため、比較的好人間関係を築けている。しかしながら、人間関係が固定されていることにより、現状に満足し、新しいことに挑戦して自分をより高めようとする姿はあまりみられない。

こうした現状の背景には、3つの要因が考えられる。新しいことに挑戦して失敗するリスクの方が大きいと感じていること、固定された人間関係によることで向上心が育ちにくいこと、挑戦するメリットそのものを感じ取れないことがあげられる。

そこで本実践では、「学級力向上プロジェクト」、「外部講師や地域の人々とのかかわり」、「発信の場の工夫」の3つに重点を置き、自分に自信をもち、新しいことに挑戦することができる子どもを育てたいと考えた。

2 実践の方法

(1) **対象** 5年松組 24人

(2) 基本的な考え

わたくしは、自分に自信をもち、新しいことに挑戦することのできる子どもを育てたい。そこで、挑戦していこうという前向きな気持ちをもたせるためには、自己肯定感の向上が必要不可欠であると考えた。本実践では、「学級力向上プロジェクト」に重点を置いて、とりくむことにした。

学級力向上プロジェクト

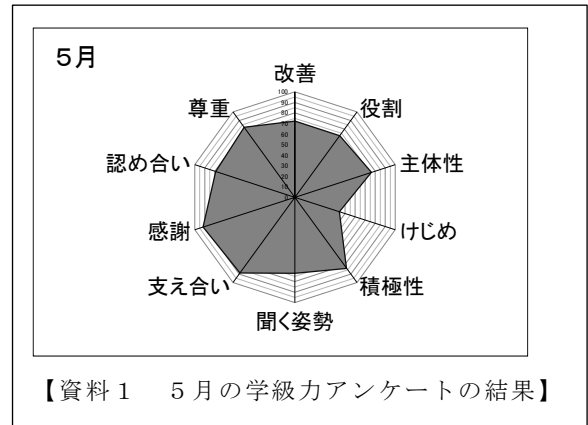
学級の課題を自分事としてとらえ、課題解決のために自分にできることを考えて実践する。実践する中で自分の役割に有用感を感じ、学級内で認め合うことで自己肯定感を高める。

3 実践の内容

学級力向上プロジェクト 「初めてやったけど、上手にできたなと思いました」

(1) 青空タイムの運営に挑戦しよう

本学級の学級目標は「ニコニコハッピー25 たけえもんと5つの約束～助け合い・けじめ・笑顔・もっと挑戦・みんななかよく～」である。この学級目標は、子どもたちがこんな学級にしたいという願いから作成した。5月に学級力アンケートをとり、学級の現状をレーダーチャートで視覚化し、全員が共有した。【資料1】わたくしが考える学級力とは、学級の基礎・基本となる力を10種類の項目に分けて構成したものである。これらの力を高めることによって、誰もが居心地のよい学級に近づくことができると考える。また、子どもたちが安心して挑戦しようとする気持ちを高めることができるだろうと考え、本実践に取り入れた。



学級力アンケートの結果をもとに、学級会を行ったところ、「けじめの項目が低い」という意見が多く出た。そこで、「けじめ」の項目を向上させるために、時間を守ることでできる学級にしよう話し合い、授業開始時のチャイム着席ができるようにと、みなで呼び掛け合った。また、レーダーチャートで学級の現状を視覚化したことによって、他にも「改善」「主体性」「役割」などの課題に気付くことができた。

そこで、次は学級目標の項目の一つである「もっと挑戦」に焦点を当て、高学年である5年生として、学校のためにとりくめることはないかと話し合った。その結果、「青空タイム」（異学年でさまざまな活動にとりくむ時間）の運営に挑戦しよう決まった。

本実践では、何事にも真面目にとりくむものの、自分に自信をもてず、なかなか前向きになれないAの変容を追うことで、実践の考察をすることにした。

(2) 事前の話し合い活動（学級会）

最初に青空タイムの運営にあたり、必要なことを話し合った。青空タイムは6年生が、リーダーとして企画・運営が行われているが、6年生の活動の様子を話し合うことで、リーダーには遊びの種類を決めるだけでなく、最初のあいさつや遊び方の説明などさまざまな役割があることを初めて知った。振り返り活動では、「6年生がこんなたいへんなことをしていると初めて知った」と、記述する子どももいた。

(3) 青空タイムの事前練習

Aは、活動の趣旨を青空タイムの活動班にうまく説明ができなかったことから、新しいことに挑戦することをためらい、このとりくみに意欲的ではない様子がうかがえた。他にも青空タイム当日を迎えることに、「うまく運営できるかな」などと不安を口にする子どもがいたため、運営について話し合う場を設定した。すると、「5年生だけで運営の練習をする」という案が出た。そこで、運営する側と遊ぶ側にわかれて、青空タイム本番の活動と同じように練習した。練習を経験した子どもたちは、「説明が長いと時間が足りなくなる」「朝のうちに準備をしないと間に合わない」など、本番を想定したことで新たな気付きが得られたようだった。不安を感じる子どもが多くいたが、練習の機会を設けたこと

で、不安な気持ちを共有し、改善をはかることができた。多くの子どもが自信をもてた青空タイムの事前練習の機会は、とても有意義なものとなった。

振り返り活動で、Aは、「初めてやったけど、上手にできたなと思いました」「次は役割を決めて、しっかりと考えてやりたいと思った」「意外に楽しかった」と記述していた。

【資料2】活動前は自分の思いだけを優先していたが、不安を感じているのは自分だけではないと知り、「自分だけから友だちへ」と視野を広げることができた。そして、自分に少し自信をもつことで、次への意欲を高めることもできた。

初めて、やったけれど、じょうずに出来たな
と思いました。次は、役わりを決めて、
しっかりと考えてやりたいと思いました。
意外に楽しかった。

【資料2 運営の練習後のAの記述】

(4) 青空タイム当日

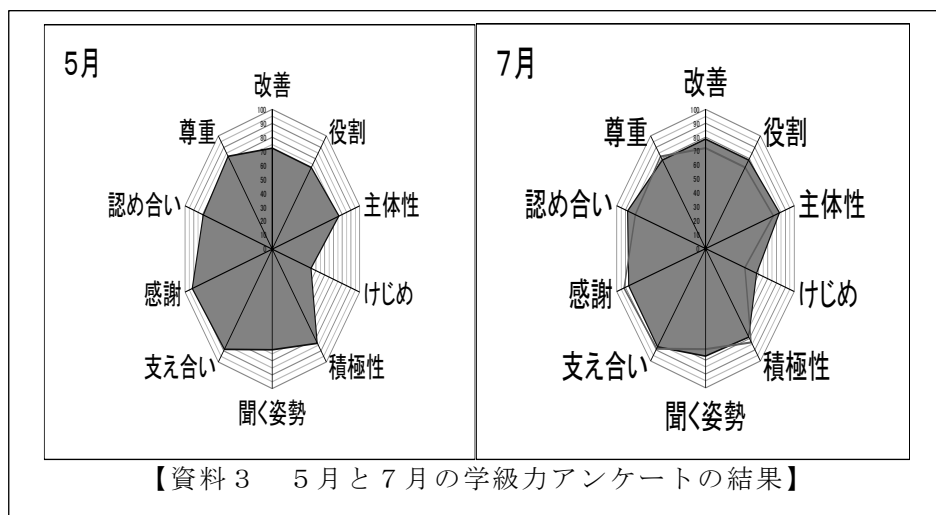
青空タイム当日は、これまで運営の練習をしたこともあり、学級の子どもたちが自信をもって活動をすすめることができた。

活動後、学級内で認め合う活動を取り入れ、それをもとに自分の振り返りをした。「学級の友だちにほめてもらってうれしかった」「みんなが楽しんでくれてうれしかった」「朝から準備をしてよかった」など、青空タイムを成功したことにより多くの子どもが自信を深めることができた。また、他者評価を通して自分の役割に有用感を感じ、「今度はもう少しドッジボールのコートの線を大きくかこうと思う」と、さらに活動をよりよいものにしていこうとする向上心を高めることもできた。

Aも「次は内容をしっかりと考えてやりたいと思ったけれど、みんな楽しそうでもよかった」と記述していた。この活動を通してAは、自分のできなかった面を反省するだけでなく、「自わから友だち」、そして「他学年の子どもたち」にまで視野が広がり、自分だけでなく周りの思いに寄り添えるほどの成長がみられた。

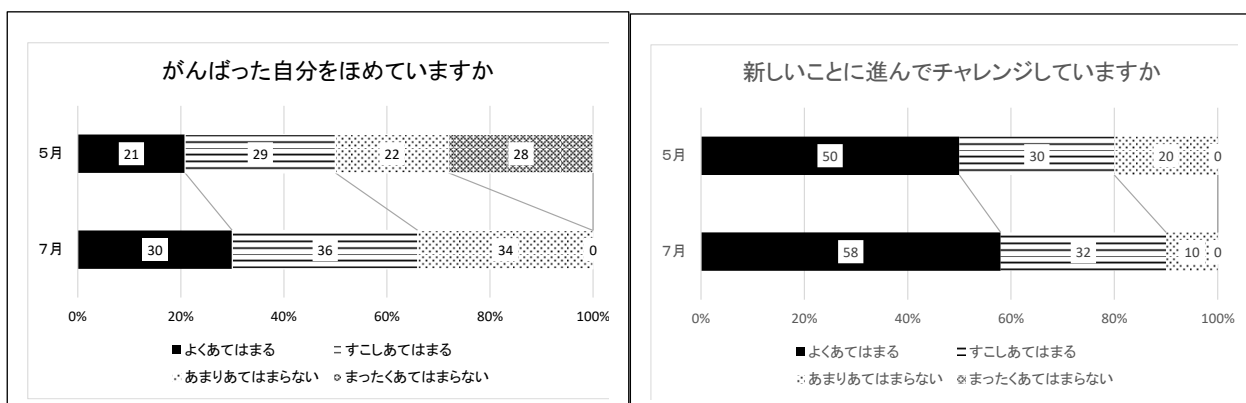
7月に学級力アンケートを行った。5月に比べて「主体性」「役割」「改善」「認め合い」「聞く姿勢」

「はじめ」の6つの項目で数値が高くなったことから学級全体でよりよい方向をめざし始めていることがわかる。【資料3】ただし、少し数値が下がってしまった部分もある。



4 おわりに

4月と7月に5年生を対象に学校生活に関するアンケート調査を行った。【資料4】



【資料4 4月と7月のアンケートの結果の比較】

「がんばった自分をほめていますか」の問いに対して、「よくあてはまる」「少しあてはまる」と答えた子どもは50%から66%に増加した。「新しいことにすすんでチャレンジしていますか」の問いに対しては、80%から90%に増加した。

以上のことから、今回のとりくみにより、次のような成果と課題が考えられた。

(1) 成果

実践を通して、子どもたちが主体的にとりくむ様子や挑戦しようとする様子から多くの子どもが自己肯定感を高め、新しいことに挑戦しようとする気持ちを高めることにつながった。また、子どもたちからは「もっと挑戦していきたい」という声が多くあがるようになり、学級に活気が生まれた。それと同時に、高学年として学校全体へ意識をむけ、よりよくしていこうという雰囲気広がった。

学級力向上プロジェクトについて

レーダーチャートを活用し、学級の現状を視覚化することで、学級のよさや課題が明確になった。それをもとに学級会で話し合うことで、子ども一人ひとりが学級の課題を自分事としてとらえ、課題改善のための実践に意欲的にとりくんだ。とりくみを通して、お互いを認め合い、自分の役割に有用感を感じ、自分に自信をもつことにつながった。青空タイムの運営に挑戦した後の学級会では、「これからも5年生主体でやりたい」「もっと新しい遊びを取り入れていきたい」など、新しいことに挑戦しようとする意見が多くあがり、これをきっかけに今後も月1回は、5年生が主体となって青空タイムを運営していくことになった。

Aの変容について

当初は、何事にも真面目にとりくむものの、自分に自信をもてずなかなか前向きになれない様子であった。振り返りや発言からも、「できない」「やりたくない」などの消極的な言葉が多かった。しかし、本実践を通して、自分に自信をもち、前向きな気持ちをもつことができた。振り返りや発言にも前向きな言葉が多くみられるようになり、学級の友だちから認められる経験を数多くしたことによって、自己肯定感が高まったことが感じられる。学級でも笑顔が増え、学級委員としての信頼も日々高まっている。最近の振り返り活動では、「挑戦していきたい」という言葉をよく使うようになり、向上心をもって日々過ごすことができている。

(2) 課題

今回の実践で成功体験を積み重ねたことで、子どもたちは自信を深めることができた。挑戦していこうという気持ちの高まりがみられる一方、現状に満足している子どもがいるのも事実である。今後は「さらなる高みをめざす」ことを課題にあげ、失敗を恐れずに挑戦する子どもを育てていきたい。

中学校 1 年生 実践研究事例

前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成

1 実践のねらい

現在の子どもたちは、将来の夢や希望を見出せず、悩んだり、苦しんだりしている。また、自分らしく生きることができる「居場所」が少なく、自分に自信をもてなく、前向きに行動しようとする気持ちも薄れている。このめまぐるしく変化する社会で、自分らしさを発揮しながら、仲間とともに困難な状況を乗り越えていくことが必要不可欠となっている。

わたくしが受けもつ中学校 1 年生は、明るく元気で楽しそうに学校生活を送ることができている。しかし、仲のよい生徒どうしで一緒に居ることが多かったり、行事以外では必要以上に級友とかかわろうとしなかったりする生徒もいる。これは、他者とかかわることが苦手だったり、小学校の頃の人間関係のもつれから不登校や登校渋りを経験し、他者と接する機会を自分から遠ざけてしまっていたりするなど、誰とでも上手に接することの大切さに気付かず、前向きな気持ちで行動することができないためであると考えた。

そこで、「生徒どうしのつながりを深める活動」と「自他のよさをいかして、働き掛け合う活動」を通して、前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成をはかりたいと考え、実践にとりくんだ。

2 実践の方法

(1) 対象 第 1 学年 3 組 30 人

(2) 基本的な考え

わたくしは、前向きな気持ちで行動することができる生徒を育成したい。前向きな気持ちで行動することができる生徒とは、生徒どうしによるつながりを深め、自他のよさをいかしながら働き掛け合って行動することができる生徒であると考えた。そこで、本実践では、「一年間、学級のみんなで楽しい学校生活を送るためには、どうしていくとよいか」を一人ひとりに考えさせ、学級目標を考えさせる。学級目標を生徒どうしで決定させた後には、決定した学級目標の達成に近付いているかを日々の生活をふまえて定期的に振り返らせていく。

また、生徒どうしのつながりを深め、誰もが楽しく学校生活を送ることができるために、「みんなにあいさつ大作戦」を実施する。この実践では、あいさつをする習慣を身につかせながら、生徒どうしのつながりの量を増やしていく。そして、あいさつには、「する人」と「返す人」の両方が存在することを意識させて、あいさつの質を高めていくことで、生徒どうしのつながりをさらに深めていくようにする。次に、体育大会や合唱コンクールなどの学校行事では、「自他のよさに気付き、そのよさをいかして働き掛ける活動」を通して、一人ひとりに役割を与え、互いに認めたり、励ましたりしながら前向きな気持ちで行動することができるようにする。

3 実践の内容

1 生徒どうしのつながりを深める活動 「いろいろな意味につながっているね」

学級目標を決めることは、学級全体で学級に対する思いや考え方を共有し、目標達成にむかってとりくむことで、生徒どうしのつながりが深まっていくと考えた。

そこで教員は、4月の最初の学活で生徒に「どんな学級にしたいか、どんな生活を送りたいか一人ひとりの思いを書いてみよう」と伝えた。すると、生徒たちは「楽しい学級にしたい」、「男女平等、SDGsを意識して



【資料2：班員で話し合っている様子】

いきたい」、「全力でやりたい」、「よいことをすると自分に返ってきて、幸せの輪がドンドン広がるようにしたい」、「出会いを大切にしたい」などとプリントに記述した。

その後、教員が「学級のためになる目標を考え、生活班で発表しよう」と伝えた。生徒たちの話し合いでは、「この学級目標はわかりやすいね」や「明るい感じがいいよね」など、楽しそうにとりくむ様子がみられた。(資料2)生活班での話し合い後、班で一つずつ学級目標を決定し、黒板に書いた。(資料3)

1班	明るい笑顔で、全力で	2班	3組矢の如し
3班	S u n	4班	一日一善
5班	七転八起	6班	一期一会

【資料3：班で発表された学級目標】

この学級目標案をもとに、班の代表者が学級目標に込められている思いを発表したとき、Aが聞き間違えた発言から新しい学級目標が誕生し、多くの生徒から認められる場面があった。

B:	3組矢の如しは、光陰矢の如しから考えました。それは・・・
A:	え！？コインランドリー！？
C:	いいね、覚えやすいね。
B:	・・・(少し困った表情で)確かに覚えやすいけど、それってどういう意味になるのか教えてください。
A:	洗い終わった洗濯物のようなキレイな心をもつてことだよ。
D:	何かトラブルが起きても、水に流す、とかもあるね。
E:	清潔な教室を保つ、もありそうだね。
B:	みんなの意見を聞くと「コインランドリー」っていろいろな意味につながっているんだね。

この会話以外にも、「洗濯物を回すように、会話を回す」や「コインランドリーで物が落ちたとき、『落ちましたよ』と気遣いのできる人になる」といった内容が出された。Bは、新しい学級目標への理解を示していたが、少し困った様子であったため、教員は「Bの班、そして全部の班の発表を聞いて、決めるようにしよう。学級目標は、みんなのためになることが大切だよ」と伝えた。教員の話聞いた後、Bはみんなに「コインランドリー、いい響きだし、意味もわかりやすくもいいかも」と共感する発言をした。全部の班が発表した後、「コインランドリー」も含めた7つの学級目標案から多数決を取ったところ、「コインランドリー」が学級目標に決まった。

今回の活動で決まった学級目標は、教員による「動機付け」はあったものの、生徒どうしで学級目標を考え、決定することができた。今後は「コインランドリー」に決まった学級目標通りに「キレイな心」をもち、「話し合える」仲間と、「気遣い」をしながら学校生

活を送ることができているかを定期的に振り返り、目標を達成しようとする過程の中で、生徒どうしのつながりを深めていきたい。

2 生徒どうしのつながりを深める活動 「あいさつするっていうのはどうかな？」

教員は学級目標を決めてから、学級の様子を常に見守っていたが、全員が学級目標を意識して行動しているようには見えなかった。そのため、学級目標通りの生活を送るには何が必要なのかをみんなで話し合った。

教員： みんな、学級目標を意識して生活しているか、少し心配しています。
B： 先生、「コインランドリー」のようにやってるよ。
C： 僕たちの心は、とてもきれいです！！
教員： うん、確かに。みんなの心はとてもきれいです！！
全員： （笑い声が聞こえる）
教員： でもさ、それ以外にあった学級目標の思いって、何だったか思い出せる？
全員： （周りと話してざわついている）
D： 明るく、楽しくだったような……
教員： （悲しそうな表情で…）仲間と話し合える、仲間に気遣いできる、だよ。

生徒は学級目標に込められている「話し合える仲間」「気遣いできる」という思いを意識しておらず、みんなが共有して行動していくことができていると実感した。そこで、教員は、「目標達成のために必要なことは何だろう？」と問い掛け、「生徒どうしのつながりを高めていけば、目標達成に近づくよ。みんなができることを今一度考えてみよう」と伝え、生徒どうしで話し合うようにした。

E： 目標達成するために、「話し合える仲間」だと、具体的には何がありそう？
A： やっぱり、みんながかかわることがいいよね。
F： 「気遣いができる」だと？
F： う～ん、気遣いって考えると、（大分考えてから）あいさつするってのはどう？
C： おっ「あいさつ」することは、話し合うし、相手を気遣っていることにもつながるよね。

話し合いを終えた後に、教員は「みんな、いい気付きが増えたね」と生徒たちの話し合いの様子を笑顔で伝えた。そして、「今みんなが考えていることを書いてみよう」と伝えたところ、多くの生徒が目標達成にむけた考えを記述することができた。（資料4）

☆ みんなのために、自分で決めたこと ☆ できるだけ多くの人のかわりをつくること	☆ みんなのために、自分で決めたこと ☆ クラスみんなに積極的に声をかけること
☆ みんなのために、自分で決めたこと ☆ 自分からコミュニケーションをとれるようにがんばります。	☆ みんなのために、自分で決めたこと ☆ あいさつをきちんとする

【資料4：目標達成におけた生徒たちの記述】

今回の実践を通して、多くの生徒が生徒どうしのつながりを深めるために必要なことは何かを気付くことができたと考える。今後は、生徒が見つけた課題を改善し、学級、学校が楽しく、前向きな気持ちで行動することができるための「生徒どうしのつながりを深める活動」にさらにとりくんでいくことにした。

3 生徒どうしのつながりを深める活動 「よし、しっかりあいさつしていくよ!!」

実践2での話し合いの中で、生徒Bの発言である「あいさつ」に着目し、生徒どうしがつながりをさらに深めることができるよう「みんなにあいさつ大作戦」を実施することにしました。

校外学習が近付いた6月初旬の帰りの会で、教員は「あいさつカード」を配付してみんなと次のような話をした。

B: 「あいさつカード」??先生、これな～に??
 教員: みんなのつながりをさらに深めたいと思ってね。
 C: でも、なんであいさつなんですか?
 教員: みんなが学級目標の振り返りで「あいさつをきちんとする」とか「積極的に話し掛ける」って書いたんだ。つながりを深めるためには会話という働き掛けが必要だということを自分たちで感じているんだよ。先生は、会話の第一歩はあいさつだと思うんだよね。
 C: なるほど～。楽しそうだね。
 D: やってみようよ。

生徒たちは、少し不安そうな様子であったが、いろんな生徒にあいさつをしたりあいさつをされたりする数が増えていく中で、楽しそうな表情でとりくんでいる様子が日に日に増していった。その結果は「あいさつした数」の平均値にも表れた。最初の日は平均値は3.96回であったが、次の日以降は、平均値が上がった。(資料5)

6月	6日(月)	3.96回
	7日(火)	13.75回
	8日(水)	11.96回
	9日(木)	12.34回
	10日(金)	12.89回

【資料5：学級でのあいさつの平均値の様子】

また学級通信で毎日の結果を公表したり、教員の思いを書いたりしたことで、「あいさつの数が増えたね」や、「あの子めっちゃあいさつしてるもんね」などの会話が学級全体で聞かれるようになった。あいさつの量が増えたことから、今度はあいさつの質を高め、つながりをさらに深めるために、「あいさつ個票」を配布した。(資料6)

番号	6		
名前	C		
項目	あいさつした数	あいさつされた数	あいさつ返答率
6月6日	27	3	11%
6月7日	27	17	63%
6月8日	28	15	54%
6月9日	28	15	54%
6月10日	28	15	54%

【資料6：あいさつ個票(例：生徒C)】

教員: あいさつする人が増えて、先生はうれしいです。
 全員: (うれしい表情を見せる)
 教員: (何気なく)「あいさつ個票」を配付します。
 全員: 何これ?「あいさつされた数」、「あいさつ返答率」って何?
 教員: ふふっ、これはね～、あいさつがきちんと行われているかを確認するものです。もしかしたら、適当にあいさつをして、それを「あいさつした数」にカウントしていない!?
 C: 俺ちゃんとしてるし。
 教員: 「あいさつ返答率」で100%に近いか確認してみよう。生徒C、どうかな?
 C: ……。(結果を見て苦笑い)
 教員: あいさつはただ闇雲に「おはよう、おはよう。」って言えばいいってわけじゃないよね。あいさつをする、そして、あいさつが返される、これが本物のあいさつだよ。さらに、そこから会話がスタートすることができれば、お互いをもっと知ることができて、つながりは深まっていくよね。そんな、質の高いあいさつって、素敵じゃない?
 C: そっか、その通りだね。よし、しっかりあいさつしていくよ!!

この話し合いの後、教員は生徒たちに「みんなにあいさつ大作戦」を実施している期間は、「毎日のあゆみ」を記入するよう説明した。また、「毎日のあゆみに書くのは、感想だけではなく、質の高いあいさつをするための工夫や級友との変化があったことを書くようにしよう」とも伝えた。

生徒たちは、「目を見てあいさつをする」、「名前を呼んでからあいさつをする」など「質の高いあいさつ」をするための工夫を記述していた。(資料7) また、「あまりしゃべらない人とあいさつができるのでなんか楽しいです」や、「今日も朝いろんな人があいさつしてくれてうれしかったです。また最近、あいさつが増えているから、みんなにあいさつ大作戦が終わっても続くようにしたいです」、「今まで話をしたことがなかった〇〇さんや△△さん、◎◎さんと、あいさつをしてから会話ができるようになりました」と記述している生徒がいた。(資料8)

またこの週は校外学習があったため、「校外学習で一緒になった人ともあいさつしたい」と記述する生徒もいた。教員は生徒の記述内容を学級通信に載せて配付したところ、生徒たちは学級のみんながどんな風に行っているかを真剣に読んだり、周りの生徒とあいさつ大作戦の話をしたりする姿がみられた。(資料9)

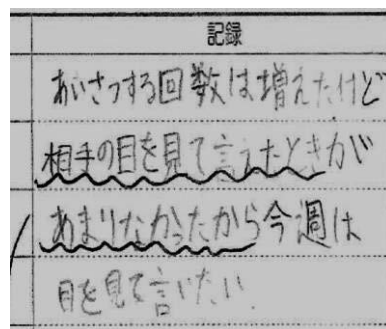
また、今まであまり話したことのなかった校外学習の班員とあいさつをする様子が増えたり、「〇〇さん、おはよう。今日も一日がんばろうね」など、質の高いあいさつをしたことで、今までかかわりがなかった級友とも会話が始まったりする姿が多くみられた。この結果、この週の「あいさつした数」の平均値はすべての日で10回を超えていた。(資料10)

あいさつの量のみを意識した前の週とは異なり、質も意識したあいさつにしたことで、ある程度あいさつの数は減ると予想していた。しかし、前週の結果とほぼ変わらない数値が出たことに教員はうれしく感じた。これは、生徒が「みんなにあいさつ大作戦」を前向きにとりくんだ結果であったと考えられるからである。

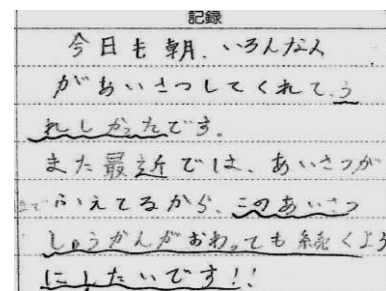
2週間実施した後に、「友情の深まりはどうなったか」のアンケートを取った。その結果、92.8%の生徒が友情の深まりがよくなっていると実感していることがわかった。

・とてもよくなった	14人	・まあまあよくなった	12人
・あまり変わらない	2人	・悪くなった	0人 (30人中28人回答)

しかし、一部の生徒は、「みんなにあいさつ大作戦をしているから、数を増やそうとあいさつしているように思えた」と記述していた。このことから、生徒どうしのつながりが深まっていると実感することができていない生徒もいることがわかった。そのため、生徒全



【資料7：あいさつの質を高めるための記述】



【資料8：あいさつの質を高めるための記述】



【資料9：学級通信を真剣に読む生徒の様子】

2週目の学級平均	
13日(月)	13.10回
14日(火)	11.10回
15日(水)	14.86回
16日(木)	校外学習当日のため未実施
質の高い挨拶平均 11.67回	

【資料10：2週目のあいさつの平均値】

員でつながりが深まっていると実感することができるように、体育大会や合唱コンクールなどの学校行事を活用して「自他のよさに気づき、そのよさをいかして、周りを認めたり、励ましたりしていく実践が必要だと考えた。

4 自他のよさをいかして働き掛け合う活動 「つながろう体育大会」

「みんなにあいさつ大作戦」では、級友とつながるきっかけをつくることはできたが、つながりを深めるまでには至らなかった。そこで、自他のよさに気づき、そのよさをいかしながら、つながりを深めることができる「つながろう体育大会」を実施することにした。

- 教員： もうすぐ体育大会が開催されます。あなたたちは、どのような気持ちで体育大会にのぞみますか？
- A： 絶対に優勝したい！！
- B： でも、あのクラスには勝てないよ。
- C： そんなのやってみないとわかんないじゃん！！
- D： でも、俺らってそんなに運動、得意じゃなくない！？
- 教員： ありがとう。そうなんだよ。30人もいるんだから、運動が得意な仲間もいれば、あまり得意じゃない仲間もいるよね。
- B： そうだよ。楽しくできりゃよくない！？
- E： 順位なんて気にせず、とりあえずがんばるってどう！？
- F： それじゃ、3位以内をめざしてみたら！？

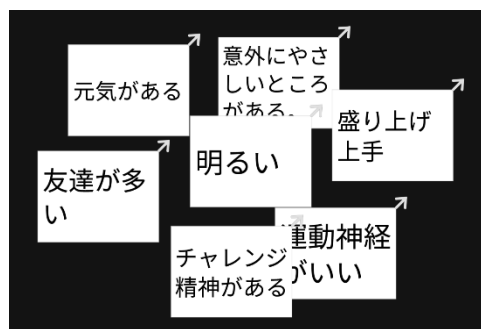
この後の話し合いで、学級全体で「勝つことよりも楽しむことを優先しよう」と決まった。そこで担任は、もう一度学級全体に問い掛けた。

- 教員： もう一度聞くけど、楽しむって、どういうこと！？
- E： みんなで応援したり、協力したりして、誰かが嫌な思いをしないことです。
- F： そういえば、生徒Eさんに応援されてうれしかったことがあります！
- G： わたしが困っているときに、声を掛けてくれたのは生徒Aさんでした！
- 教員： 仲間を励ますことができるのは、とても大事なことだね。
- 全員： （うんうんとうなずく）
- 教員： わかりました。みんながそれぞれのよさをいかせる体育大会になったら、みんなのめざす体育大会になるんじゃないですか？
- B： そうか、楽しく体育大会をやるってそういうことか！

この話し合いにより、楽しい体育大会にするということは、一人ひとりのよさをいかして協力することだということがわかった。しかし、自分のよさを知らない生徒がいることもわかったため、級友から自分のよさを教えてもらう活動「ICTでつながろう」を設定することにした。

「ICTでつながろう」では、ロイロノートスクールの生徒間通信を活用して、生徒どうしで、互いのよさをテキストで送り合った。(資料11)

生徒たちは、「私って、こんなにもいいところがあるんだ」や「自分のことをやさしいとは、思っていなかった」など、たくさんの自分のよさに気付くことができていた。このよさを発揮できる体育大会での種目決めを生徒どうしで話し合った。【資料11：級友から届いた自分のよさ】



【資料11：級友から届いた自分のよさ】

数日後から、体育の授業で体育大会の種目別練習が始まった。練習では、級友のよさや

工夫に対して、認めたり励まし合ったりする様子がみられた。

A： 私がリレーの練習をしている時に、生徒Bが声を出して応援してくれていて、とてもうれしかった！

C： 生徒Dも、一緒に応援していたね！

B： 生徒Fは、たくさんの人に走り方をアドバイスしていたよ！

D： 楽しく練習するって、こういうことか！

目標は達成できなかったが、生徒は充実した顔で体育大会を終えた。体育大会の振り返りを書かせたところ、多くの生徒が「応援する側もとても盛り上がり、楽しめました」や、「全員で協力して、がんばったからとてもよい思い出になりました」、「学級の一体感が楽しかった」と好意的な記述をしていた。

また、「すごく速かったよ」、「がんばってたね」などの級友の声掛けがうれしかったとも記述した。Dの感想では、「お互いを褒め合ったりして、もっとなかよくなれました」など、級友どうしで認め合いながら練習や本番にとりくめていたことがわかった。(資料12)

2. 400mリレーがわかれて3人とお互いを褒めたりしてもっと仲良くなりました。最初は体育大会がめっちゃ楽しかったけど、体育大会はすごく楽しい。友達も仲良くなれていい事ばかりでした。クラスの結果が3位以内にはなれたけど、クラスのみんなが一つになって応援したり競技を一生懸命がんばったりして盛り上がったので、ふたつで、クラスがより仲良く一つになれた楽しい体育大会でした。

【資料12：認め合いのよさを実感する生徒Dの記述】

実践後に、「クラスには、いい人だなと思う友だちや、すごいなと思う友だちはいますか」というアンケートを取った。その結果、「とても思う」が22人(75.9%)、「まあまあ思う」が5人(17.2%)、「あまり思わない」が2人(6.9%)、「思わない」が0人(0%)となった。

	実践前(28人)		実践後(29人)	
とても思う	3	10.7%	5	17.2%
まあまあ思う	11	39.2%	13	44.8%
あまり思わない	13	46.4%	8	27.5%
思わない	1	3.5%	3	10.3%

【資料13：実践前、実践後のアンケート比較】

また、実践の前後の「あなたは、運動や勉強、係活動や委員会活動、趣味などでクラスから認められていることがありますか」というアンケート結果を実践の前後で比較すると、右記の結果になった。(資料13)

このことから、実践を通して、友だちのよさを認められる生徒や、自分のよさを認められたと実感している生徒が増えていることがわかった。しかし、認められたとまったく感じていない生徒が1人から3人に増加していることから、学級全員が参加できる認め合い活動を行う必要があると感じた。

5 おわりに

本実践の期間中、わたくしが新型コロナウイルス感染症感染者との濃厚接触者となり、出勤できない状況があった。後日、出勤すると学年の教職員から「3組の生徒たちがあいさつ活動を取りくんでいましたよ」という報告があった。すぐに生徒に聞いてみると、「みんなで話し合っって『みんなにあいさつ大作戦』をやろうと決めました」と話してくれた。また、自然にあいさつする生徒が増え、「3組の生徒はよくあいさつをしてくれるので、授業が気持ちよく始められます」と他の教員から言われたり、係以外の生徒が、配係や掲示係の生徒を手伝ったりするなど、あいさつだけにとどまらず、学校生活にも前向きにとりくんでいる様子がよくみられるようになった。

しかし、課題としては、学級全員が参加できる認め合い活動ができていなかったため、生徒どうしのつながりがまだ十分に深まっていないと感じている生徒が一部いることである。

現在、11月に行われる合唱コンクールにむけて学級全体で合唱練習にとりくんでいる。合唱練習では、一人ひとりが役割を担うことで、全員が責任をもって役割を果たせるようにしている。ここでも認め合い活動を実践しているため、合唱コンクールでは、より多くの生徒が、前向きに行動することができるようになってきている。今後も前向きな気持ちで行動することができる生徒の育成にむけて、自己研鑽に励んでいきたい。

IV おわりに

1 明らかになったこと

現在の子どもたちは、自分の力を十分に発揮する機会が失われたり、将来の夢や希望を見いだすことができなくなったりしている。また、不登校問題やいじめの問題も増加傾向である。このような課題を克服するために、自治的諸活動と生活指導部会では、「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに実践研究にとりくんできた。また、「協働を通じた人とのかかわりや学びへの追求」についても検討を重ねてきた。その結果、以下のような重要性が明らかになった。

- 子どもの気持ちの背景にあるものや発達段階をふまえ、実態を正しく把握したうえで活動内容を考え、子どものやる気を引き出す支援を行っていくこと。
- 地域と学校間の連携をふまえて、集団の質を高めるための活動を行っていくこと。
- 集団生活の中で、子どもどうしのかかわりを大切にし、リーダーの育成や集団の質を高める支援を行っていくこと。
- 問題行動の解決や予防をはかるために、家庭や地域との連携を大切にしたり、子どものコミュニケーション能力を育成したりしていくこと。

以上のことから、教員は子どもたちが将来たくましく生きる姿を見すえて、子ども一人ひとりの気持ちを考え、実態にあった働きかけを行っていくことが重要であることを確認することができた。

2 来年度への課題

本年度の自治的諸活動と生活指導部会では、たくましく生きる子どもを育てるために学習タブレットを活用したものや、学級力を高めるとりくみ、多様性を考えた関係諸機関と連携したとりくみなど、多岐に渡るものであった。

今後も子どもが成長しながら歩み続けることと同じように、教員も成長の歩みを止めることなく研究と実践にむけて研鑽に励んでいくことが必要だと考える。

次年度のレポートについては、本年度のレポートで課題となった、「子どもの実態を正しく把握した活動内容のあり方」、「集団の質を高める支援のあり方」、「問題行動の解決や予防をするために家庭・地域との連携とその支援のあり方」などについて、子どもたちがたくましく、そして安心・安全に生きていくことができるよう、日々子どもたちのことを考えたねばり強いとりくみが期待される。

最後に、正会員の方々および、おとりくみいただいた各分会・各単組の方々に、紙面をお借りしてお礼を申し上げますとともに、ここに掲載した小中学校の実践研究例を「たくましく生きる子どもを育てる」ためのご参考にしていただければ幸いです。